第二講　新傾向の問題ファイナルチェック　40分

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

ノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・センという学者がいる。彼は、①新しい貧困論を生み出したことで知られている。彼の貧困論は、選択できる自由の問題と深く関わっている。

センは「貧困はたんに所得の低さというよりも、基本的な潜在能力が奪われた状態と見られなければならない」と主張する。それは「所得の低さ以外にも潜在能力に——したがって真の貧困に——影響を与えるものがある（所得は潜在能力を生み出す唯一の手段ではない）」からだ。また「貧困とは受け入れ可能な最低限の水準に達するのに必要な基本的な潜在能力が欠如した状態として見るべきである」とも述べている。

潜在能力（capability）とはセン独自の概念である。それは「十分に栄養をとる」「衣料や住居が満たされている」という生活状態（これをセンは「機能」と言う）に達するための個人的・社会的自由を指している。たとえばセンは、次のように言う。「腎臓障害で透析を必要とする人は、所

得こそ高いかもしれないが、それを機能に変換する際の困難を考慮すれば、この人の経済手段（つまり、所得）は依然として不足していると言える。貧困を所得だけで定義するのであれば、所得からどのような機能を実現できるかという潜在能力を抜きにして、所得だけで見るのでは不十分である。貧困に陥らないために十分な所得とは、個人の身体的な特徴や社会環境によって異なるのである。」

腎臓障害を抱えて透析治療が必要な人Aは、その障害を持たない人Bと同じ暮らしをしようとすれば（同じ「機能」を達成しようとすれば）、そのハンディキャップのために、Bよりも多くの所得を必要とする。それゆえ、②AはBより高い所得を得ているのに、Aのほうが不自由な暮らしを強いられる、という場合がある。この不自由さを、センは「潜在能力の欠如」と表現する。

こうも述べている。

「潜在能力の欠如は、世界におけるもっとも富裕な国々においても驚くほど広く見られる。（中略）たいそう繁栄したニューヨーク市のハーレム地区の人が四〇歳以上まで生きる可能性は、バングラデシュの男性よりも低い。これは、ハーレムの住人の所得がバングラデシュ人の平均的な所得よりも低いからではない。この現象は、保健サービスに関する諸問題、行

き届かない医療、都市犯罪の蔓延など、ハーレムに住む人々の基礎的な潜在能力に影響を与えているその他の要因と深く関連している。」

　ニューヨークのハーレム地区住人の所得がバングラデシュ人の平均所得を上回っていることは、日本のホームレスの人たちの所得がアフリカの最貧国の平均所得を上回っていることと同様に、疑いの余地がない。国連が「絶対的貧困」だという一日一ドル以上の所得を得ているホームレスの人は、少なからずいるだろう。しかしそれは、貧困ではない、ということを意味しない。なぜなら、そこには生活上の望ましい状態（機能）を達成する自由（潜在能力）が欠けているからだ。

　たとえ、より所得の少ない人に比べれば、いくらか多い所得を得ていたとしても、その所得によって望ましい状態を得られる[ア]ホウト（選択の自由）を持っていなければ、その人の潜在能力は奪われた状態にある。医師のいない[イ]リトウでいくらお金を持っていたとしても、満足に医療にかかることができなければ、その人はすぐに医療にかかれる環境に暮らす人たちよりも「満足な医療にかかることができる」という「機能」から遠い。それは、お金がなくて国民健康保険料を長く滞納した結果、[*注]資格証を発行されて事実上医療機会を奪われてしまった人たちと同じである。医療にかかるという選択肢が奪われている、という点で、両者はともに基本的

な潜在能力を奪われた状態にある、と言える。それが「貧困」だ、とセンは言う。

「潜在能力の欠如」（自由に選択できないという不自由）は、個人的な要因であると同時に、社会的・環境的な要因でもある。ニューヨークのハーレム地区でたまたま七〇歳や八〇歳まで生きる人がいるからといって、「他の人たちには努力が足りない」と、平均寿命の短さを早く死んでしまう人たちの自己責任で裁断することは妥当ではない。必要なのは、その地域や個人の諸条件を改善して、長寿を可能にする環境を整えることだ。

それゆえ「開発／発達（development）」とは、単に所得を上げるだけでなく、望ましいさまざまな生活状態（機能）に近づくための自由度（潜在能力）を上げていくことだ、とセンは言う。「開発／発達とは、人々が享受するさまざまの本質的自由を増大させるプロセスである」「開発／発達の目的は不自由の主要な原因を取り除くことだ。貧困と圧政、経済的機会のゥ乏しさと制度に由来する社会的窮乏、公的な施設の欠如、抑圧的国家の不寛容あるいは過剰行為などである」と。

私自身は、ホームレス状態にある人たちや生活困窮状態にある人たちの相談を受け、一緒に活動する経験の中で、センの「潜在能力」に相当する概念を〝溜め〟という言葉で語ってきた。

③〝溜め〟とは、溜池の「溜め」である。大きな溜池を持っている地域は、多少雨が少なくても エ慌てることがない。その水は田畑を オ潤し、作物を育てることができる。逆に溜池が小さければ、少々日照りが続くだけで田畑が干上がり、深刻なダメージを受ける。このように、溜めは、外界からの衝撃を吸収してくれるクッション（緩衝材）の役割を果たすとともに、そこからエネルギーを汲み出す諸力の源泉となる。

〝溜め〟の機能は、さまざまなものに備わっている。たとえば、お金だ。十分なお金（貯金）をもっている人は、たとえ失業しても、その日から食べるに困ることはない。当面の間そのお金を使って生活できるし、同時に求職活動費用ともなる。落ち着いて、積極的に次の仕事を探すことができる。このとき貯金は〝溜め〟の機能を持っている、と言える。

しかし、わざわざ抽象的な概念を使うのは、それが金銭に限定されないからだ。有形・無形のさまざまなものが〝溜め〟の機能を有している。頼れる家族・親族・友人がいるというのは、人間関係の〝溜め〟である。また、自分に自信がある、何かをできると思える、自分を大切にできるというのは、精神的な〝溜め〟である。

あるときこの〝溜め〟の話をしていたら、取材していた外資系通信社の記者が「自分にも〝溜め〟があったんだな」と言い出した。聞けば、前の

会社でリストラに遭って二年間失業状態だったと言う。フリーライターとして仕事をしていたが、収入は非常に少なかった。しかし、ある友人が今の会社を紹介してくれて、なんとかまたこうやって取材ができている。自分の場合は、三年間失業していられるだけの金銭的な〝溜め〟があり、また仕事を紹介してくれる友人という人間関係の〝溜め〟があったから、また好きなジャーナリズムの世界で仕事をしていられる、と。

　また、あるとき講演後の(カ)キュウケイ時間に一服していたら、聴講者の一人が寄ってきて「自分の兄も大変なことになりましてね」と話し出した。聞けば、ヤミ金に手を出してしまって一家離散の憂き目に遭い、もう今どこで何をしているのかわからないと言う。取立て屋たちは「息子の不始末の(キ)尻拭いをするのは親の役目だ」と八〇歳になる母親を責め始めたが、自分が知り合いの法律家に頼んで間に入ってもらい、親にまで被害が広がるのはなんとか防げた、と話していた。このとき、その母親にとって法律家を紹介してくれる彼のような息子がいたことは、重要な人間関係の〝溜め〟である。

　フリーターや主婦パートで仕事が不安定であっても、親や(ク)ハイグウシャと同居していれば、すぐに生活には困らない。親が(ケ)膨大な教育費をかけてくれれば、大学にも通える。このとき、本人はそれぞれの〝溜め〟

を持っていることになる。

逆に言えば、貧困とは、このようなもろもろの〝溜め〟が総合的に失われ、奪われている状態である。金銭的な〝溜め〟を持たない人は、同じ④失業というトラブルに見舞われた場合でも、深刻度が全然違ってくる。ただちに生活に窮し、食べる物に事欠くために、すぐに働くところを見つけなければならない。職種や雇用条件を選んでいる暇はない。窮乏度がひどくなれば、月給の仕事を選ぶか、日払いの仕事を選ぶかという選択肢は、事実上存在しなくなる。月給仕事を選ぶためには、最初の給料が入る一ヵ月または二ヵ月後まで生活できるだけの〝溜め〟（貯金、あるいは親元に住んでいて衣食住に事欠かないなど）が必要になるからだ。

三層（雇用・社会保険・公的ｺフジョ）のセーフティネットに支えられて生活が安定しているとき、あるいは自らの生活は不安定でも家族のセーフティネットに支えられているとき、その人たちには〝溜め〟がある。逆に、それらから排除されていけば、〝溜め〟は失われ、最後の砦（とりで）である自信や自尊心をも失うに至る。〝溜め〟を失う過程は、さまざまな可能性から排除され、選択肢を失っていく過程でもある。

＊資格証――被保険者資格証明書。納付期限後一年を経ても国民健康保険料を納めず、保険証の返還を求められた際、市区町村から交付される。この証明書で受診した場合、医療費の全額を自己負担することになる。

（湯浅誠『反貧困』による）

一　傍線部ア〜コの、漢字をひらがなに、カタカナを漢字にしなさい。

二　傍線部①「新しい貧困論」とあるが、センの「貧困論」の新しさについて説明した次の文の空欄に入る適切な語句を、本文中から抜き出して答えなさい。ただし、［ a ］には五字、［ b ］には四字の語句が入る。

センは貧困を単に［ a ］としてのみ捉えるのではなく、衣食住といった［ b ］の充足が実現されていないこととして捉えている。

三　傍線部②「AはBより高い所得を得ているのに、Aのほうが不自由な暮らしを強いられる」について、本文中で言及されている「腎臓障害」のような健康上の問題とは別の事例を考えて挙げなさい。

四　傍線部③「〃溜め〃とは、溜池の「溜め」である」について、次の問いに答えなさい。

⑴筆者の言う「〃溜め〃」と「溜池の「溜め」」のあいだにはどのような共通性があるのか、三十五字以内（句読点を含む）で説明しなさい。

⑵「潜在能力」以外の語で、ここに言う「溜め」を言い換えたものとして最も適切なものを本文中から抜き出しなさい。

五　傍線部④の「失業というトラブル」に備えるなら、具体的にどのような「〃溜め〃」を持つことが理想的か。本文全体の内容を踏まえ、三点に分けて説明しなさい。

六　本文前半で繰り返し引用されるアマルティア・センの貧困論と、本文後半で提示される筆者の思考は、どのような点で重なるのか。「潜在能力」および「〃溜め〃」という語を使わずに説明しなさい。

一

ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ

二

a

b

三

四

(1)

(2)

五

六

第二講　解答

一

ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ
方途	離島	とぼ	あわ	うるお	休憩	しりぬぐ	配偶者	ぼうだい	扶助

二

a 所得の低さ

b 生活状態

三

Aは子沢山でその上年老いた両親も健在であり、扶養しなくてはならない家族が多い。そのため、Bよりも所得は多いのに、Aの方が不自由な暮らしを強いられる。

四

(1)

危機に陥ったとき、それを緩和し、乗り越える力を生み出す源泉となる。

(2)

セーフティネット

五

当面の生活や求職活動を可能にする貯金などの金銭的な〝溜め〟、頼れる家族・親族・友人がいるという人間関係の〝溜め〟、危機にあっても自信や能動性や自尊心を保ちうる精神的な〝溜め〟。

六

貧困とは単に金銭的な貧しさを意味するのではなく、望ましい生活状態を達成するための社会的・環境的な諸資源や可能性の欠乏であり、それが帰結する選択の自由の欠如であるとする点。